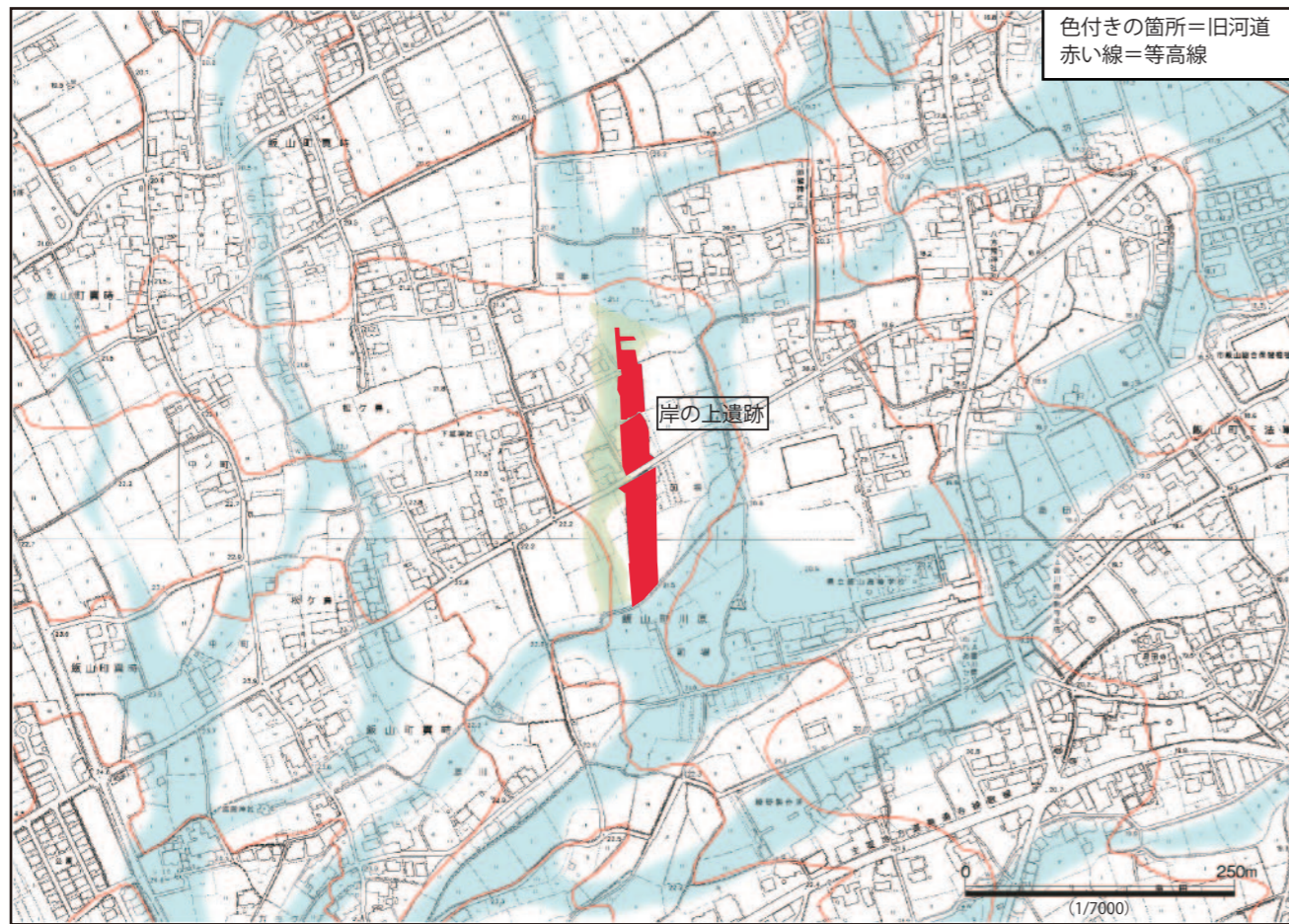


岸の上遺跡 現地説明会

はじめに

岸の上遺跡は丸亀平野の東端付近に位置します。北は飯野山、西には土器川を臨み、この土器川の旧河道の氾濫により堆積した微高地の上に立地しています。また遺跡を東西に横切る「市道樋ノ口岸ノ上線」の部分は古代に都と地方を結んだ幹線道路である、「南海道」と推定されています。平成 25 年度から香川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施しており、これまでの調査では奈良時代後期から平安時代前期にかけての柵列や溝で区画された掘立柱建物、さらに上述の南海道に伴うと考えられる側溝が見つっています。



遺跡周辺地形図（丸亀市都市計画図（1/2500）を縮小し、一部加筆して掲載）

条里とは

条里とは、全国規模で施工された土地区画のことです。一辺約 109m という統一的な基準で、方格に土地を区画するもので、現在の地形にもその名残があります。このような区画割りには「条里地割」と呼ばれます。岸の上遺跡が所在する丸亀平野では 7 世紀末から 8 世紀初頭にかけて条里が施工されたと考えられており、主軸方向が約 30° 西偏するという特徴があります。

讃岐の古代

古代における集落は掘立柱建物を中心に構成されるといえます。古墳時代までの代表的な建物の竪穴建物は、7 世紀の中ごろをもってほとんど見られなくなります。また古代には、中央集権国家の形成に伴い、日本各地で地方の政治を司る施設が造営されました。現在、埋蔵文化財センターが調査を実施している、讃岐国府跡をはじめとして、讃岐でも官衙と呼ばれる公的施設が各地に設置されたと考えられます。現在、香川県で官衙と考えられるような遺跡は、善通寺市の稲木北遺跡や坂出市の川津一ノ又遺跡などがあります。これらの遺跡では、整然と並んだ掘立柱建物群が見つっていたり、役人の持ち物である帯金具が出土しています。

今年度調査の概要

岸の上遺跡と洪水

岸の上遺跡の周辺には地形の観察から、かつて土器川の旧河道が流れていたことが分かります。この旧河道は度々氾濫を起こしており、調査でも氾濫に際して堆積したと思われる砂層を確認しました。出土した遺物等を参考にすれば 7 世紀の中頃と 12 世紀頃に大きな洪水が起き、調査ではそれに伴う土砂の堆積を確認しました。

整然と並ぶ古代の建物群

7 世紀中頃の洪水により形成された砂層の上に掘立柱建物群が建てられました。砂層が形成された直後にはまず、配列不明の建物群が作られます。その後に南北に軸を揃えた建物群が出現します。南北軸の建物は 3 棟（建物 1～3）を検出しており、建物 1 と 2 は桁行 4 間、梁間 3 間、面積約 43 m² と構造と規模が統一されています。これら 3 棟の建物は、桁行の柱を一直線に整然と揃えています。また重量物を支えることに適した総柱構造であることから、倉庫としての役割を担っていたと考えられます。

南北軸の建物群に対して、奈良時代に入ると条里に沿うように軸を揃える建物群（建物 4～7）が出現します。条里に沿う建物は 4 棟が見つかり、このうち建物 4 は推定される規模と構造が建物 1, 2 とほぼ同じになります。加えて、遺構の前後関係から南北軸の建物よりも新しいことが分かります。これらのことから、条里地割が施工されるのに伴い南北軸の建物が建て直しを経て条里に沿う建物へと変化していったと考えられ、条里の施行に対応しながら建物群が継続的に運営されていたことが窺えます。

南海道の道路側溝

今年度の調査でも道路側溝が見つかりました。道路側溝は 7 世紀中頃の洪水堆積層を掘り込んでいます。これまでの調査を踏まえれば溝は 3 条確認でき、最低でも 2 回の掘り直しが行われています。溝底に凹凸があり、灌漑水路に適さないことから道路側溝としての性格が窺えます。

この道路側溝が現道（市道樋ノ口岸ノ上線）の南と北を東西方向に走ることから現道部分が古代の南海道である可能性が高いと言えます。なお、見つかった建物群の中でこの側溝と最も近接するのは建物 7 であり、その距離は 17m になります。

遺跡の評価

今回公開する調査区では古代の遺構として掘立柱建物 7 棟、溝 6 条が確認されました。特に掘立柱建物群については倉庫とみられる建物 1, 2, 3, 4 における統一的な規格と整然とした配置が特徴といえます。現在のところ木簡や帯金具など官衙であることを示す遺物は出土していませんが、見つかった倉庫の規模は官衙と考えられている稲木北遺跡（23 m²）や川津一ノ又遺跡（33 m²）のものを大きく凌駕します。従って、規模・構造・規格から今回確認した倉庫群は公的施設に伴う倉庫である可能性が高いと言えます。だとすれば、古代官道に面した交通の要衝地において、税として徴収した物資等を保管していた可能性もあります。

今後の課題としては讃岐国府跡をはじめとする、県内において古代の公的施設であったと考えられる遺跡との比較検討を踏まえたうえで、古代讃岐国および古代鶴足郡においてどのような役割を担っていたのかを明らかにしていく必要があると言えます。

岸の上遺跡年表

時代	西暦（年）	遺跡の動向	
飛鳥時代	600	土器川旧河道氾濫。砂層が形成 配列不明の建物群が造営 南北軸の建物群（建物 1～3）が造営 丸亀平野にて条里地割施工	
	645		大化の改新
	700		南北軸の建物群（建物 1～3）が造営
	701		南北軸の建物群（建物 1～3）が造営
奈良時代	710	条里に沿う建物群（建物 4～7）が造営	
	794	平安京遷都	
平安時代	800	区画された建物群（建物 8, 9）が造営	
	900		
	1100	土器川旧河道氾濫。砂層が形成	